# 連帯して語ること

## Julie Otsuka の *The Buddha in the Attic* における“we”と“they“の視線

小谷真由

### はじめに

Julie Otsuka は、1962 年、California 州 Palo Alto で、移民一世の父と二世の母の間に生まれた日系アメリカ人三世作家である。自身は写真花嫁として異国に渡った経験も、真珠湾攻撃をきっかけとする日系人強制収容の経験もないにもかかわらず、自身の作品では、それら日系アメリカ人の集団的記憶を取り上げてきた。本発表で取り上げた、彼女の第二作である *The Buddha in the Attic* (2011) も、明治時代、1900 年から 1920 年にかけて増加した日本人女性移民「写真花嫁」たちの生活を描いている。本作品の特徴のひとつは、語り手に“we”という一人称複数代名詞が用いられていることである。本作品において、“we”は第一には写真花嫁であるが、物語の進行とともにその境界線は揺れ動き、最終的にはアメリカ人を“we”とする語りが登場する。Natalya Bekhta は、“we”による語りについて、「連帯」についての意識を強化するが、その連帯の枠組みのなかに他者を引き入れる可能性も、排除する可能性もはらんでいると主張する。たしかに、テクストにおいて「私たち」を自称するという行為は、「私たち以外の誰か」を区別し、線引きをすることと同義である。しかし、本作品に関する先行研究では、“we”の内包的な側面にのみ言及がされており、排他的な側面についての議論は十分ではなかった。そこで本発表では、作品内における“they”という他者との差異化を強調する効果に着目しながら、本作品を分析した。

### “we”の射程範囲 —“they”とされるものとの比較から

まずは、“we”が何と自分たちを区別しているのかという点に着目しながら、“we”のアイデンティティについて考察した。写真花嫁としてアメリカに渡る“we”は、船の上という外の世界から断絶された限られた空間において、 写真花嫁とそれ以外という他者化を一貫して行うことで、「日系人女性」としての結束を強めていく。その後、夫や白人男性という他者との出会いによって、自己の尊厳やアイデンティティを確保できなくなる日本人女性たちは、自らを“a fool” (54) とみなし、人種的・性別的にアメリカ社会の底辺に置かれる者として“we”の輪郭を固めていく。他者から強要される日系人女性像を内面化していくことで、彼女たちは“we”という集団の強度を保っていくのである。しかし、他者との差異のなかで明確になり、結束を強めていく“we”の輪郭は、太平洋戦争の開始とともに揺らぎ始める。アメリカ社会から「敵」と認識されるようになってからの様子を描く第六章“Traitors”では、強制連行されるかもしれないという不安から日系人同士で疑心暗鬼になり、日系一世女性としての“we”の結束が崩れていく。こうして、それまでの章で築いてきた「日系人一世女性」としての結束が崩れていくと同時に、それまで“we”に含まれない他者だった者たちが、“we”の一部になっていく。“we”の輪郭は物語の進行とともに拡張していっていたが、最後は三人称的な視点からたった一人の女の子に焦点が当てられ、日系人の物語は幕を閉じる。作品前半での日系人一世女性としての「私たち」の連帯は保持されていない。つまり、大戦の勃発で「アメリカ人」と「日本人」というより大きな対立項が明白になり、アメリカ国家というより強大な権力による「私たち」と「彼ら」の強制的な線引きが行われるなかで、日系一世女性が彼女ら自身で「私たち」を定義できなくなっていることを示しているとも考えられるのである。「私たち」のアイデンティティがいかに脆く、「日系人」「アメリカ人」という対立がより強制力をもつ戦争中において、「日系人女性一世」としての声を持つことがいかに困難なものであったかを、本作品は示すことに成功している。

### マジョリティのマイノリティに対する無関心

Shoshana Felman は、著書 *What Does a Woman Want?* のなかで、主に性別における差異について言及しつつ、差異を乗り越えることにおける話すことと聞くことの重要性を主張している。この主張を踏まえ、本作品において、差異を乗り越えるための語りが差異を抱える者同士で行われているのかという点を考察し、本作品における声の脆さの原因を明らかにした。最終章“Disappearance”の冒頭では、それまでの語り手であった日系人たちが、別の“we”という主体によって見られる対象とされ、“we”が別の何かに転換されたことが明白にわかる形で始まる。一章から五章までの語りの蓄積で形作られてきた日系一世女性という「私たち」は、アメリカ人コミュニティへの語り手の転換により、たちどころにして「日本人たち」という「彼／彼女ら」のくくり

に回収される。それまで “we” が主体となっていた語りは、最終章の冒頭部で徹底的な物主語の構文で書き換えられ、“we” から見た日系人たちの不在が強調されている。突然アメリカ人たちに視点と語りの主体が切り替わることで、日系人たちは、アメリカ人たちの物語から退場させられるのである。日系人一世女性たちは、たしかに個人の物語を “we” の語りという形式によって記録として語ることができていた。しかし、テクスト内において語られる彼女たちの声は誰かに聞き取られてはいない。本作品における「私たち」の転換は、差異をのりこえて語りかけるどころか、むしろ、マジョリティたちのマイノリティに対する無関心に起因する、マジョリティにとっての物語の押し付けを表していると言えるだろう。オオツカは、語り手を “we” と設定することで日系一世女性というマイノリティに語る声を与えてはいるが、最後まで彼女ら自身による能動的な自己定義は達成させず、最後にその声を圧倒的な権力に属するマジョリティ社会によって容赦なく回収させる。このように “we” を転覆させることによって、「写真花嫁」をはじめとするマイノリティについての物語を、マイノリティだけの物語にせず、アメリカ社会を含めた全体的な物語として、三世の立場から問い直している。

## 現在における聞き取りの可能性

本文中でタイトルに関連する言及が登場するのは、日系人たちが強制退去させられる日の様子を描いた第七章 “Last Day” での、ある一人の女性についてのたった一文 “Haruko left a tiny laughing brass Buddha up high, in a corner of the attic, where he is still laughing to this day.” (109) である。本章は全体を通して過去形の語りが用いられているが、この一か所のみが現在進行形で、to this day という、読者が作品を読んでいるその時までを指し示す可能性すら含む表現が書き込まれていることによって、「仏さまが今でも笑っている」というその連続性と現在性が強調されている。本作品は、物語の最初と最後で “we” の対象が入れ替わるというダイナミックな語りが取られているにも関わらず、変化しないものについてのタイトルが付けられているのである。この「仏さま」や仏教に関するものが、作中では日系人のアイデンティティの表象となっていることを踏まえると、このタイトルに関わる一文は、屋根裏という、メインストリームから逸脱した場所にではあるが、日系人のアイデンティティがたしかに存在していることを表していると考えられる。白人アメリカ人にとって「この世界」にいない存在になっていても、日系性が現在においてもまだアメリカコミュニティに存在しているということの主張になっていると考えられる。作品内でマジョリティの語りに回収されることで「消失」したと思われた日系人たちは、今でもまだアメリカにいて、マイノリティとしてそれぞれの物語を持ち続けており、その存在を忘れ去るか、思い出して尊重するかは、現在におけるマイノリティによる語りと、マジョリティによる聞き取りの姿勢に委ねられている。つまり本作品は、過去に日系人の声を聞き取り損ねたアメリカ社会に対する批判を we-narrative の形式を用いながら主張すると同時に、未来における聞き取りの可能性も提示しているのである。

## おわりに

本作品 *The Buddha in the Attic* は、we-narrative の形式を用いることで、差異に満ち溢れたさまざまな自伝的な声を描きながら、同時に、テクストの中で誰が誰を差異化し、自分たちという集合的なアイデンティティを形成・維持するのかを明示している。そうすることで、「写真花嫁」という性別的にも人種的にも抑圧され、トラウマを被った存在による語りを代弁しつつ、当事者による語りがなぜ困難であったかという、他者との関係から浮かび上がる原因をも照射する。本作品において、日系人たちは過去の物語から救われることなく、戦争開始と同時に白人アメリカ人を語り手とする中心的な物語から退場させられる。そうすることによって、オオツカは、過去に日系人に降りかかった出来事を、物語の場で昇華させることなく、現在における現実と接続するのである。*The Buddha in the Attic* は we-narrative の形式によって、オオツカが「正史から排除されがちだった」と考える女性たちに声を与えると同時に、その「声」を奪うアメリカ社会の構造をあぶり出す。その構造を提示することによって、マイノリティに対する無関心を問題視し、トラウマを帯びた物語を持つ抑圧された人々の語りを、今現在において聞き取ることの重要性を提示している。

## 主要参考文献

Bekhta, Natalya. *We-Narratives: Collective Storytelling in Contemporary Fiction*. The Ohio State UP, 2020.
Felman, Shoshana. *What Does a Woman Want?: Reading and Sexual Difference*. The Johns Hopkins UP, 1993.
Otsuka, Julie. *The Buddha in the Attic*. Anchor Books, 2011.